【ねがいましては】

令和５年１月６日　　*KYOWA SCHOOL*
第３８６号

「壁へ向かう力」

前回ご紹介した、『灰谷健次郎の発言〈4〉』ーすべての怒りは水のごとくにー　の中にある少女の文章をすべて記します。

―この三年間、私は中学生という肩書でいたけど実際は違ったと思います。中学校なんか一カ月も通わなかったからです。小学校の頃から時々休んでいたけど、中学では一カ月通ったきりまったくといっていいほど学校には行きませんでした。この三年間は私にとって大切な時間だったと思います。中学校に入ってからは、急に時間がなくなってしまいました。それは慣れてしまうとなんとも思わなくなることなのかもしれませんが、私は慣れることができないように思いました。でも学校はそれなりに楽しかったです。それは勉強とかではなくて、授業中に先生に隠れてする友達同士のおしゃべりや、手紙のやりとりでした。それはとても楽しかったんだけど、とにかく時間がなかったように思います。学校へ行っても、スケジュールが全部つまっていて、家へ帰るのは夕方です。そこでもう、私はとても疲れてしまいました。でも、宿題をやらないといけないし、私は塾へ行ってなかったけど、行っている人はどこに自由な時間があるんだろうと思っていました。つまり、考える時間がなかったのです。勉強以外のもっと大切なことを、自分で納得のいくまでとことん考える時間がありませんでした。だから何かに疑問をもつような時間もなかったのです。だから私は、学校を休んでいる時はいつも何かを考えていました。中学校は勉強についていけない子はダメというような、落ちこぼれというレッテルをはってしまって、まるで 勉強ができないと生きていけないというような考え方を、意図的ではないにしろ、知らず知らずのうちに植えつけてしまうようなところがあると思うのです。もちろん学校によっても違うだろうし、すべてがそういう学校だとは思いませんけど、でも少なからずそういうところがあるように思いました。学校というか、私たちよりも長く生きている大人に教えてほしいのは、数学や英語だけじゃなくて、人間として大切なことが一番だと思います。私たちはまだ若いから、これからたくさん壁にぶつかったり、時には粉々に砕けてしまうかもしれません。そういう時に、マイナスからゼロに戻って、また壁へ向かっていく力を、大人から教えてもらいたいと思うのです。私は学校を否定するつもりはありません。でもほとんどの子供は、絶対に行かないといけないという状態です。でも、それだけではなくて、他の道も選べるような世の中にしてほしいと思います。そしたら、学校へ行かないとダメな人間になるという考え方がなくなると思うのです。家で勉強しても、学校へ行っても、自分の学習したいことだけ勉強しても、ちゃんと人として認めてもらえるような世の中になれば、私たちももっとニコニコして人間らしく生きていけると思うのです。―

原稿用紙３枚以上にも渡るこの文章は、学校へ一カ月も行っていない少女が書いたものです。この中で最も私のこころに残ったのが『勉強以外のもっと大切なことを、自分で納得のいくまでとことん考える時間がありませんでした。』この部分が、彼女の思う学校が人を人として全く見ていない、まるで世界の様々な戦地へ赴き、そこで立派に戦うことだけを目的としたロボットを造っているだけの場所に感じてしまいました。『時間がなかった』確かにそう思います。

学校へ行く、毎時間先生の書きあげる黒板を必死に写し取る。休み時間、塾から出された宿題に必死に取り組む。放課後、部活動。そして帰宅、塾のある子は塾へと向かう。彼女が書いたのは２５年以上前、今私が書いたのは今の子供たちを見てのことです。全く違和感がありません。そして、その繰り返しであっという間に卒業を迎える。この少女は２５年後をどのように想像していたのでしょう。

今も昔も、学校は何も変わっていない。いや、本当は多くの教職員の方々は変えたいと思っていると思います。先生方は疲れ切っています。この少女と同じ、考える時間がないのです。その理由を考えてみました。

我が子が現在小学６年生だとします。それまでは「小学校はこうあるべきだ、そうあるべきだ」と、親は深く考えてきたかもしれません。しかし翌年、我が子が中学生になると、さて、親は小学校のことを考えるでしょうか。いや、中学校のことを考えるはずです。今まであった小学校への想いはどうでもよくなるのです。実はその繰り返しが、学校が変化しない大きな要因の一つだと思っています。次が今の学校は灰谷さんも書いていますが、エリート育成のための学校になりきっているということです。官僚や国会議員の多くはエリートです。大手企業に勤める人たちの多くもエリートたちです。在学時、成績優秀だったお子さんたちです。合格・成績至上主義です。今や地方はより過疎化が進み、首都圏一極集中化は益々進んでいます。リモートワークが発達し地方分散化が進んだとしても、そのほとんどはホワイトカラーです。デスクワークが主体です。ビジネスに順応する能力（高学歴）を最大評価した教育のままなのです。日夜、高学歴を目指し、子どもたちは大人たちの引いた『成績』という魔物にみごとに操られ生活しています。中でも親の成績欲はより高まっていると感じています。その矛盾に少女は気がついています。自分を冷静にみつめ、今後の自分はどうあるべきか、学校はどうあるべきか深く考えています。私はそれが当たり前だと思います。それが『ひと』です。今の教育行政は、それに気がつかれぬようにそっと子どもたちをコントロールしているように感じます。毎日部活動や進学塾で疲れ切って帰宅する子に、じっくりと考える時間はありません。子どもたちよ、立ち上がれ！